

生き生き

NO. 87 平成27年6月号 岡崎市現職研修生活科広報部発行

「WANT（～したい）」があふれる魅力ある実践を

生活科部長 田中 俊二

私の勤務校である大樹寺小学校は、徳川家康とゆかりの深い大樹寺の前にある。校舎内には、祖洞和尚像や大樹寺の陣のジオラマ、門のレプリカなどがあり、また校庭には旗かけの松、総門などがある。特色ある教育活動として「家康学習」「自立活動」に取り組んでいる。今年、家康公顕彰400年の記念すべき年であり、5月に行われた運動会では、これまでの伝統を受け継ぎ、家康にちなんだ演目などに力を入れて取り組んだ。

1年生が「学校探検」を行うなかで、学校にある古いものや家康にかかわるものにも目を向けていく。何なのか知りたい、触ってみたい、といった思いが強まり、祖洞和尚の背の高さ体験、手足の大きさ比べ、着物の大きさ体験、門の重さ体験などの活動を通して、様々な気づきが生まれる。



先日、ある会で、人材活用プロデューサーの大谷百合子さんの講演を聞いた。大谷さんは吉本に入社し、昔、漫才師の横山やすしのマネージャーを務めていたそうである。話の中で印象に残ったことのひとつが、「人の人生は、WANTで始まる」。何々したい、ああしたい、こうしたいという思いが原点で、元気が出る。しかし、「年を取るにつれて、MUSTになる」。何々しなければならぬ。ああしなければならぬ、こうしなければならぬという思いになりがちで、元気がない。

授業づくりも、子どもがぜひ、「みたい」「やりたい」「考えたい」と思う「WANT（～したい）」があふれる活動や体験を仕組むとともに、教師側も、この実践をぜひやってみたい、これを子どもたちにぜひ見せたい、やらせたい、考えさせたい、という「WANT」な気持ちで取り組めば、素晴らしい実践につながるのではないかと思う。

今年度も、サブテーマ「子どものつぶやきに耳を傾け、対話を大切に、思考を深める授業」のもと、思考を促し、気づきの質を高めることをめざして確かな実践がなされることを期待したい。そのためには、「WANT（～したい）」な内容と、それを支える教師の手だてが必要である。まず一人一人の子どもの行動や、発言、つぶやきなどの「表現」をつなぎ合わせて、しっかり子どもをとらえていかなければならぬ。そして、考える場の設定や振り返りの活動、対話などを通して思考を促し、気づきを関連付けたり自分の考えを自覚したりできるようにしていくことが大切である。子どもとともに魅力ある授業実践に取り組み、その研究成果をぜひ広げ深めていきたいものである。